

尼たちへの消息

——よく生きよとの——

長谷川時雨

青空文庫

日蓮聖人の消息文せうそくぶんの中から、尼御前あまごぜたちに對あたへられた書簡を拾つてゆくと、安産の護符ごふをおくられたり、生れた子に命名したりしてゐて、哲人日蓮、大詩人日蓮の風貌躍如として、六百六十年の世をへだてた今日、親しく語りかけられる心地がする。もとよりこの尼御前あまごぜたちは在家ざいけの尼たちであるが、送られた手紙は、文章も簡潔で實に好い。それよりもよいのは、寄進きしんされた品目ひんもくをいつも頭初はじめに書いて、感謝してゐる率直な表現だ。もとより私の見方は、文章の上から見てのことばかりだが、後に多くの文雅ぶんがの士しがさうした書きかたをしたのを見ると、これを學んだのなにかと思ふほどだ。文中景色を叙したのはすくないが、駿河の松ま

野つのだの殿ごへんじ御返事といふ一文には、

鷲てうもく目ひとゆひ一結、白米しらよね一駄だ、白小袖一、送り給たび畢をはんぬそもく。抑

此山と申すは、南は野山漫まん々々として百餘里に及び、北は身

延山高たかく峙たちて白根が嶽たけにつづき、西には七面めんと申す山峨が々々

として白雪絶えず、人の住家一字うもなし、適たまく、問まひくるもの

とては梢しほを傳まふま猿さ猴るなれば、少すこも留とどまることまなく還かへるさ急いぐ恨

みなる哉。東は富士河漲みなぎりて流沙りうさの浪なみに異ならず。かかる所

なれば訪おとふ人なも希まれなるに、加か様やうに度たび々々音信おんしんせさせ給たまふ事、

不思議の中の不思議也。

これは、建治二年十二月九日に身延から佛道みちの教へに答へられた長い書簡の書出しである。

おなじ松野殿へ、弘安元年五月一日に與へられたのには、

日月は地におち、須彌山はくづるとも、彼女^{かのによにん}人、佛^{ほとけ}に成^な

らせ給^{たまは}ん事疑なし。あらたのもしや、たのもしや

干飯^{ほしいひ}一斗^と、古酒^{こしゆ}一筒^{ひとつづつ}、ちまき、あうざし(青麩^{あをふ})、たか

んな(筍^{かた／＼})方々^{かた／＼}の物送り給^{たま}ふて候。草にさける花、木の

皮^{かは}を香^{かう}として佛^{ほとけ}に奉^{ほう}る人、靈鷲山^{れいじうざん}へ參らざるはなし。況や、

民^{たみ}のほねをくだける白米^{しらよね}、人の血をしぼれる如^{ごと}くなるふる

さけを、佛法華經^{ほとけほけきやう}にまいらせ給^{たま}へる女^{によにん}人の、成佛得道疑

べしや。

これは全文である。この、況^{いはん}や民の骨をくだける白米、人の血

を絞れるごとき古酒、といふ言葉は白米おこめが玉のやうに、白しろ光びかりに光つて見える。民の骨を碎ける白米しらよね、民の骨を碎ける白米しらよね！
げに有難い言葉ではないか。

この松野殿女房——後家ごけあま尼御前ごぜに與へられた、も一通の消息にも身延みんえん隱棲の自然が叙されてある。

麥むぎ一箱、いゑのいもさといも（里芋）一籠かご、うり一籠、旁はたの物もの、六

月三日に給ひ候ひしを、今迄御返事申候はざりし事おそれいり恐入

候。此身延さくらふこのみのぶの澤さはと申す處は、甲斐の國飯井野いひみの、御牧みまき、波木井

三箇郷かがうの内、波木井郷はきみがうの戊亥いぬるの隅にあたりて候。北には身みのぶ

延嶽たけ天をいただき、南には鷹取たかとりが嶽雲たけにつづき、東には

てんし 天子の嶽日とたけをなじ、西には又、峨々として大山つづき
 てしらねの嶽にわたれり。猿のなく音天に響き、蟬のさえづり
 地にみてり。天竺の靈山此處に來れり。唐土の天台山
 まのあた 親りここに見る。我が身は釋迦佛にあらず、天台大師にて
 はなし。然れども晝夜に法華經をよみ、朝暮に摩訶止觀を談
 ずれば、靈山淨土にも相似たり。天台山にも異ならず。但し
 有待の依身なれば、著ざれば風身にしみ、食ざれば命持ちが
 たし。燈に油をつがず、火に薪を加へざるが如し。命いかで
 かつぐべきやらん。命續きがたく、つぐべき力絶ては、或は
 一日乃至五日、既に法華經讀誦の音も絶へぬべし。止
 觀の窓の前には草しげりなん。かくの如く候に、いかにし

て思ひ寄せ給ひぬならん。兔うさぎは經きやうぎやう行ぎやうの者を供養せしかば、天帝哀みをなして、月の中にをかせ給ひぬ。今、天てんを仰ぎ見るに月の中に兎あり。されば女人にょにんの御身として、かかちよくせいまつだいる濁世末代に、法華經を供養しましませば、梵王ほんわうも天てんん眼を以て御覽じ、帝たいしやく釋たなそこは掌を合せてをがませたまひ、地神ちしんは御足みあしをいただきよろこきて喜び、釋迦佛は靈山れいざんより御手みてをのべて、御頂おんいたゞきをなでさせ給ふらん、南無妙法蓮華經南無妙

法蓮華經。恐々謹言

これは弘安二年己卯つちのとう六月二十日に書かれたものだ。

窪くぼの尼は、窪くぼの持妙尼ぢめうにとよばれて、松野殿後家尼御前あまごぜの娘だが、

武州池上宗仲むねなかの室しつ、日女御前にちぢよごぜと同じ人であらうともいふ。弘安

二年以後、日蓮聖人五十七歳ごろから六十歳ごろまでにおくられた消息の中に、

すずの（種々）御供養、送給畢。大風の草をなびかし、いかづちひと雷の人ををどろかすやうに候。よの中に、なかいかにいままで御信用候けるふしぎさよ。ねふか（根深）ければ葉はかれず、いづみ（泉）玉たまあれば水たえずと申まをすやうに、御信念ごしんねんのねのふかくいさぎよき玉たまの、心のうちにわたらせ給歟、たうとし、たうとし。恐々。

六月二十七日（弘安元年）

同二年十二月二十七日は、尼が初春の料れうの餅をおくつたと見え
て、

十字（蒸餅）むしもち五十まい、くしがき一れん、あめをけ（餠あめを）
 桶）一、送給畢。おくりたびをはんぬ御心ざしさきざきかきつくして、

筆もつひゆびもたたぬ。三千世界に七日かふる雨のかずはかず
 へつくしてん。十萬世界の大地のちりは知人しるひともありなん。
 法華經一字供養の功德は知がたしとこそ佛はとかせ給て候さくら
 へ、此これをもて御心あるべし。

と禮を述べ、その前月、十一月二日の日附けで、持妙尼御前名
 宛には、御膳料ごぜんれうを送られたので、亡入道殿なきにふだうどの（持妙尼の夫）
 の命日であつたかと、とかう紛れて、打忘れてゐたが、なるほど、
 そちらでは忘れない筈だと、昔、漢王の使で胡國ここくに行つた夫に、

十九年も別れてゐた蘇武そぶの妻が、秋になると夫の衣を砧で打つその思ひが、遠く離れてゐた蘇武そぶにきこえたといふことや、陳子ちんしは夫婦の別れに鏡を割つて一つづつ取り、妻が夫を忘れたときに鏡の破片が鵲とりになつて夫に告げたといふことや、相思さうしといふ女が男を戀ひ慕つて墓へ参り、木となつてしまつたが、それが相思樹さうしじゆといふのだとか、大唐だいたうへ渡る道に志賀の明神といふのがあるが、男が唐へいつたのを慕つた女が神となつたが、その島の姿が女に似てゐる。それが松浦佐夜姫まつらさよひめであるとか、昔から今まで、親子の別れ、主従のわかれ、いづれも愁つらいが、男女ふうふの死別ほどのはあるまいなどといはれてゐる。

けれど、そこまでは慰めであつて慰めでなく、そのあとの少し

ばかりが、眞あまごぜに尼御前ににいはれようとした眼目まなこだつたのだ。

——御身おんみは過去くわこ遠とほ々／＼より女の身みであつたが、この男をとこ(入道)

が娑婆しやばでの最後さいごで、御前おまへには善智識ぜんちしきだから、思ひだす度ほどごとに

法華經ほふけの題だい目もくをととなへまゐらせよ。と、二首の歌も書かれてあ
る。

ちりし花　をちしこのみもさきむすぶ　などかは人の返らざ
るらむ

こどもうく　ことしもつらき月日かな　おもひはいつもはれ
ぬものゆゑ

この文のなかの、娑婆での最後とは、彼女が夫入道の道心によ

つて、在家ざいけの尼となり出家し、法華經を信じ奉ずるために「女人成佛」といふ、むづかしい教理がふくまれてゐるのであらうが、弘安三年五月三日の窪くぼ尼のあまあての文の頭書とうしよなどは、景情そなはつてとてもよい書き出しだ。

ちまきはたかなぼん 粽五把、ちひ 第十本、千日（酒） 一筒（ひとづつ）、給たびをはんぬ 畢。いつもの事

にて候へども、ながあめふりて夏の日ながし。山はふかく、みちしげければ、ふみわくる人も候はぬに、ほととぎすにつひとさふらけての御おんひとこゑ、ありがたし、ありがたし——

文永八年五月七日（今から六百六十四年前）に、しでうきんごよりも 四條金吾頼

基との夫人の出産前に書かれた消息などは、女人のことといへば、表向きは済ましかへるがならひの僧侶など、恥死はぢしんでもよいほど潤達な、ありのままに出産の悦びを表してゐるものだ。

四條金吾は鎌倉幕府の江馬入道につかへた武士で、當時四面楚歌の日蓮に師事し、法華經信者の隨一ともいへる若人わかうどだ。金吾は日蓮龍の口法難のをりは、自分も腹を切らうとした無垢純粹の歸依者きえしやだ。その妻は日眼女にちがんによといひ、夫におとらぬ志を持した人で、この女房ふじんが年廿八の出産のをりに、

くわいたい
懷胎くわいたいのよし 承うけたまはり候きこ畢ひらひぬ。

それについては符ふの事ことあふせさ仰うやまつ候ひらひぬ。日蓮相承にちれんさうしやうの中より撰えら

み出して候。能々よくよく信心あるべく候。たとへば、祕藥ひやくなりとも、毒を入ぬれば藥用くすりのようすくなし。つるぎなれども、わるびれたる人ひとのためには何かせん。就中なかんづく、夫婦共に法華ほつげの持者ぢしやなり也。法華經流布るふあるべきたねをつぐ所の、玉の子出生、目出度覺候ぞ。色心しきしんにほふ二法をつぐ人ひと也。争かひをりをそなはり候べき。とくとくこそ生うまれ候はむずれ。此藥このくすりをのませ給はば、疑なりなかるべき也。闇やみなれども、燈ひい入りぬれば明あきらかなり。濁だくす水みづにも月つきい入りぬればすめり。明あきらかなる事こと日月じつげつにすぎんや。淨きよき事蓮華ことれんげにまさるべきや。法華經は日月じつげつと蓮華れんげなり。故ゆゑに妙法蓮華經めうほふれんげきやうと名なづく。日蓮にちれん又日月と蓮華との如くなり。信心の水すまば利生の月必ず應おうを垂たれ、守護し給べし。とくとく

とく生れ候べし。うま 法華經云如是妙法、ほけきやうにいはいくによぜめうほふ 又云、安樂産またはく あんらくさん
 福子云々。ふくしうんぬん 口傳相承の事は、くでんさうしやう 此辨公このべんこう（註・使僧日ちゆう しそうにつせ
 昭）うにくはしく申ふくめて候。則、すなはち如來によらいのつかひ使なるべし。
 返々も信心候べし。天照大神は玉をそさのをのみこにさかへす
 づけて、玉の如くの子をまふけたり。たまごと 然間、日の神、我がこ
 子となづけたり。さてこそ正哉吾勝とは名けたれ。日蓮うままさやあかつ
 るべき種をなづけて候へば、争か我子にをとるべき、有一たね
 うしゆかちさんぜんとう、無上寶聚不求自得。むじやうはうしうふきうじとく 釋迦如來皆是吾
 子等云々。わがこうんぬん 日蓮あにこの義にかはるべきや。幸なり、幸な
 り、めでたし、めでたし、又々申べく候。あなかしこ、あな
 かしこ。

護符ごふ——藥の功德あらはれてか、その手紙のあつた翌日、五月八日に女子が生れたので、早速名づけ親になられたのだ。

若童うま生れさせ給たまひしよしうけたまはりさくらふ由承候。目出さくらまたく覺ことへ候。誠

に今日は八日やうかにて候も、彼かれと云いひ此これと云いひ、所願しよぐわんしほ（潮）

の指す如く、春の野に華の開けるが如し。然れば、いそぎい

そぎ名なをつけ奉たてまつる。月満御前つきまろごぜんと申まをすべし。其上そのうへ、此國の

主ぬし八幡大菩薩は卯月八日うづきかに生まれさせ給たまふ。娑婆世界さばせかいの教主

釋尊しやくそんも、又卯月八日に御誕生いまなりき。今の童女どうによ、又月

は替れども、八日に生まれ給ふ。釋尊、八幡の生まれ替りと

や申さん。日蓮は凡夫なれば能よくは知しらず。是併こねかし、日蓮が符ふを進まゐ

らせし故也。ゆゑなり さこそ父母も悦び給覽。ふほよろこたまふらん 誠に御祝として、
 餅、酒、鳥目一貫文送給候畢。是また、御ごほん
ぞん本尊十羅刹らせつに申上て候。今日佛、生れさせまします時に、
 三十二の不思議あり、此事、周書異記云文しうしよいきといふふみにしるし置け
 り。釋迦佛は誕生したまひて七歩し、口を自開いて、天上てんじや
うてんかゆるがどくそん天下唯我獨尊、三界皆苦我當度。こ之の十六字を唱へ給ふ。
 今の月滿御前は、うまれ給ひてうぶごゑ(初聲)に南無妙法
 蓮華經と唱へ給ふ歟。法華經云、諸法實相。天台てんだいにいは
く云、聲爲佛事等云々。日蓮又かくの如く推し奉る。たと
いかづちおとへば雷の音、耳しい(聾)の爲に聞くことなく、日月の光り
み目くらのために見る事なし。定て、十羅刹女は寄合てうよりあひ

ぶ水（生湯）をなで養ひたまふらん。あらめでたや、あらめ

でたや。御悦び推量申候

次の年に、月満御前に經王御前といふ妹が出来たが、この時は、もはや佐渡へ遠く流されてゐた。

この日眼女が三十三の厄除けに釋尊の像を造立供養したので、それに關しては、

——厄といふは、たとへば骰子に廉があり、梔には角があり、人には關節、方には四維のあるごとく、風は方より吹けば弱く、角よりふけば強く、病は内より起れば治しやすく、節より起れば治しがたし。家には垣なければ盗人入り、人には咎あれば、敵の便となる。厄といふのはそんなものだ。家に垣なく、人に病が

あるやうなもので、守まもらせれば盗人もからめとるであらうし、關節の病も早く治せば命は長いであらう。

そも女人をんなは、一代だい五千卷くわん、七千餘卷のどの經きやうにも佛ほとけになれないと厭きらはれてゐるが、法華經ほけきやうばかりには女人佛にょにんほとけになると説かれてゐる。日本國は女人にょにんの國といふ國で、天照大神ともふす女によし神かみの築つきいだされた島しまである。この日本にっぽんには、男は十九億九

萬四千八百二十八人にん、女は廿九億九萬四千八百三十人にんの、この男

女めがみんな念佛者ねんぶつしやで、みんな阿彌陀佛あみだぶつを本尊ほんぞんとしてゐるから、

現世げんせの祈りもその如く、釋尊しやくそんの像をつくつたり、繪にしても、

彌陀みだの淨土じやうどへゆくために釋尊しやくそんを本意ほんいとしない。日眼女にちがんによは

今こんじやう生の祈りのやうだが、教主けうしゆ釋尊しやくそん像ざうを造られたから後ご

しやうじやうぶつ
 生成佛であらう。二十九億九萬四千八百三十人の女の中の第一の女人によにんであると思はれよ。

念佛まをせば極樂へ——處しよせい生いく苦あきを諦あきらめて、念願は一日も早く彌陀みだの淨土じやうどへ引き取つてもらひたいといふのが念佛衆ねんぶつしゆであるなら、穢土えいど厭離おんり、寂滅じやくめつ爲樂つゐらくの思想は現世否定である。筆者は佛教のことは、その絲口も知らないのだが、そんなふう_ににこの終りの方の文を解釋すると、前の方の關節ふしから起る不治の病も、早く治療すれば命は長いとの教へが適切に響いてくる。

これだけの抜き書きの中からすらも、女性を無知のものとして眼をつぶらせて、何事も耐忍がまんせよといふのでなく、よく生きよと

教へられてゐるのがたふとい。

ある折の日眼女へは、

——女にょにん人は、たとへば藤のごとし、をとこは松のごとし、

須臾しゆゆもはなれぬれば立ちあがる事なし。はかばかしき下人げにんも
なきに、かかる亂みだれたる世に、此このとの殿をつかはされたる心こころざ
し、大地たいちよりもあつし、地神ちじんもさだめてしりぬらん。虚空こくうよ
りもたかし。

といはれたのは、鎌倉が騒がしいのに、大概の女ならば、夫のそばを離れたがらないであらうし、夫を手許から離したく思はないであらうに、金吾殿をよくよこしてくれた、日蓮を思つてくれるは法華經を守つてくれるのだと述べられたのである。

建治二年三月、下總中山、どきにふだう富木入道の妻の尼御前には

——や矢の走ることは弓の力、雲のゆくことは龍のちから、男のしわざは女の力なり。いまどき富木どの、これへおわたりある事、あまごぜん尼御前の御力なり、けぶりをみれば火をみる、あめをみればりゆう龍をみる。男を見れば女を見る。今富木どのに見げざん参つかまつれば、あま尼ごぜんをみたてまつるとをばう。どき富木どのの御お物んものがたり候は、このはわ(母)のなげきなかの中に、りんずう(臨終)りんじうのよくをさせしと、あま尼がよくあたり、かん病びやうせし事ことのうれしき、いつの世よにわするべしともおぼへずとよろこばれ候なり。何よりもおぼつかなきはごしよらう御所勞なり。かまへ

て、さもと、三年みとせのはじめのごとくに、きうち（灸治）させ
 たまへ。病やまひなき人も無むじやう常じやうまぬかれがたし。但たゞし、としのは
 てにあらず法華經ほけきやうの行ぎやう者じやなり。非業ひがふの死にはあるべか
 らず。

と諭さとされてゐる。これは富木常忍どきじやうにんにふだう入道にゅうだうが母ははの骨こつをもつて、
 身延みんえんにゆき、日蓮上人にっれんじやうにんに母死去ははしよのせつ妻つまの尼御前あまごぜんがよく世話せわした
 ことや、妻つまが病氣びやうきがちだつた事ことをはなしたので書かかれたものと見
 える。治ちする病びやうならば癒なほして、よく生きなければいけないといは
 れてゐるのだ。つぎの「衣食御書いしよくごしよ」となへられてゐるのを見
 れば一層いっしやうその趣意しゆいがよくわかる。これもおなじ人ではないかもし
 れぬが、尼御前あまごぜんへ與あまごぜんへられたものだ。

てうもく 衣食ひをはんぬ
 鷺目一貫給畢。

それ食は、色を増し、力をつけ、命を延ぶ。衣は、寒さをふ
 せぎ、暑を支え、恥をかくす。人にもものを施する人は、人の
 色をまし、力をそへ、命を續ぐなり。

これだけの短かい手紙だが、よく讀むと、衣食の足らねばならぬことと、生命のたつとさを教へ、他人も我もおなじく、衣食が足らなければならぬを悟らし、生きることを示された、短文ではあるが意味深い書簡で、布施とか、慈善とかいふことの本義が、ウンと一聲、活を入れられたやうに響く。今の世にも生きて響くたいした手紙ではないか。

(平凡社「手紙講座」巻の三・昭和十年四月一日)

青空文庫情報

底本：「桃」中央公論社

1939（昭和14）年2月10日発行

初出：「手紙講座 卷の三」平凡社

1935（昭和10）年4月1日

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2008年12月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

尼たちへの消息

——よく生きよとの——

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 長谷川時雨

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>